

小学生の読解力と論理的思考力を高める 教授法・カリキュラムおよび教材の総合的開発

鈴木 樹 (教育学科・准教授)
高垣マユミ (児童学科・教授)
年森敦子 (家政保健学科・准教授)
柴村抄織 (教育学科・講師)
橋本吉貴 (教育学科・講師)

1. 研究の目的

近年の学力調査において、日本の子どもたちの学力低下が指摘されている。国際教育到達度評価学会 (IEA) 調査の結果からは、日本の子どもたちの学力の問題点として、特に、「読解力」と「論理的思考力」が低下していることが指摘されている。この2つの能力を育成していくためには、単に学習内容や授業時数を増やすだけでなく、学習内容の検討に加え、教授法・カリキュラム・教材の開発といった、多角的な視点から対策を講じていくことが必要であると考えられる。

2. 研究計画及び研究経過

上記の目的を達成するため、鎌倉女子大学初等部の児童を対象とした年度及び研究分野における研究計画・研究経過は以下の通りである。

(1) 平成19年度の研究経過

【研究目的】

平成19年度は、実際の学校教育のカリキュラムの中から、平成10年度版学習指導要領の「小学校国語」では第4学年で扱う「ごんぎつね」の単元を取り上げ、文学作品における児童の読解力の様相を微視的に分析した。「小学校学習指導要領」国語の第3学年及び第4学年の内容C「読むこと」(1)ウでは、「場面の移り変わりや情景を、叙述を基に想像しながら読むこと」と記述されている。これより、小学4年生の児童にとって、叙述に基づく読解活動が重要な課題となっていることが分かる。しかしながら、これまでに、児童の読解活動にはいくつかの問題を伴っていることが指摘されている。例えば、児童は、直観的な理解に頼って登場人物の心情を捉えようとするため、作品中に具体的にどのように叙述されているか、という手がかりを探索しようとはしない傾向があること (作間, 2004)、大雑把な読みの枠組みが既に存在し、各セグメントからそれに応じた限られた意味しか引き出されていない、「読み飛ばし」状態にあること (西林, 1994) 等が指摘されている。こうした児童の読解活動と、教師の意図する読解活動との間には、ズレが生じ得る可能性が考えられる。従って、本研究では、「ごんぎつね」という文学作品を取り上げ、教師と児童によって表出された授業コミュニケーションの言葉や行為を通して、教師の意図しない児童の読解活動とはいかなるものか、その実態を微視的に浮き彫りにすることを目的とする。

【研究方法】

対象は鎌倉女子大学初等部4年生の1学級の児童31名。授業は現行の「小学校新学習指導要領」に基づく教科書の指導計画に基づいて立案された、国語単元「ごんぎつね」の授業。全3セッション10時間から成り、各授業の実施時間は45分であった。授業内容については、教師と生徒の全ての映像・音声を採取できるようにビデオカメラ、補助としてデジタルボイスレコーダーを設置し、音声の採取を行った。録画記録で採取できない授業の全体像、文脈の流れや状況等の質的な分析に必要な情報を、フィールドノーツに文字記録として採取した。

【研究結果】

全10時間の授業過程のビデオ記録と、授業観察時の記録をもとに、児童と教師のすべての発話と行動を文字に書き起こした。なお、分析に当たっては、読者に他の解釈可能性を開くために、解釈者と子ども、教師と子ども、解釈者と教師との間の「相互主観的な解釈」(南, 1991)を重ね合わせる過程を提示した。具体的には、事例においては、①授業における学習課題・教師のねらい・児童の活動、②時系列に沿った発話や行為の生成された経過や状況等を明示し、授業の逐語的・表層的内容の再生だけではなく、意味的内容をも再生することで、教師と子どもの個々の発話と行為の背後にある心理的意味を捉えることを考慮した。

<事例的検討> 今回は、7時間目の授業を事例として取り上げる。7時間目の授業では、「うなぎの償いをするごんの思いの深さと、それに気づかない兵十の二人の関係のすれ違いを読みとる」ことが目標となっており、教師は、叙述に基づきながら、ごんと兵十の「現実の存在(位置)の距離関係」と「心理的な距離関係」には大きなズレがあることに児童自らが気づいていく、というカリキュラムを設定した。しかし、実際には意図していたカリキュラムに反し、7時間目の授業展開は、以下に記述するように、子どもたちが自ら2つの距離関係のズレに気づくことは困難であった。

前半の局面では、子どもたちは、ごんと兵十との「現実の存在(位置)の距離関係」を、叙述に即して読み進めていった(e.g., 「ごんが兵十のかげぼうしをふめるキヨリ」, 「ごんが兵十と加助の話聞けるキヨリ」)。その一方で、「心理的な距離関係」については、叙述に基づかず、既有経験や自らの願望を思考の根拠としていた(e.g., 「友達みたいな関係になりたいという思いは伝わる」, 「いつもそばにいるのだから兵十も気が付いているはず」)。

これらの内容はテキスト中からは確認できないため、教師は、直観的な発想ではなく、叙述に即した読みを子どもたちから引き出そうとし、課題を復唱したり、意味を精緻化するために質問したり、叙述の解釈を補足したりする、といった働きかけを講じた。しかし、7時間目まで読み進めてきたこの時点において、子どもたちは、「ごんと兵十の心が通じ合って欲しい」という願望を持って読み進めているため、テキスト中にどのように叙述されているかという手がかりを探索しようとはせず(作間, 1999)、自らの読みの枠組みに限定された、いわゆる「読み飛ばし」状態(西林, 1994)で解釈していた(e.g., 「こんなに償っているのだから気持ちは伝わる」, 「近くにいるのだから二人の心のキヨリも縮まっているはず」)。この文脈では、教師の「テキストの叙述に基づく読み」に焦点を当てた解釈と、子どもたちの「読者の願望に基づく読み」に焦点を当てた解釈の間には、大きな隔たりがあることが、如実に映し出されている。

話し合いが行き詰まってしまったため、後半の局面では、教師は話し合いを切り上げ、「兵十は1の場面のいたずらなごんとしか会っていないよね」と状況を説明したり、「自分は知っている、向こうは全然知らないこともあるでしょ?」と経験を語ったりしながら、自らの教材解

釈の枠組みに合うような形で、結論を導いていった。教師の枠組みに合うような形で、子どもたちも、「(ごんは) 実際は栗や松たけを運んで償ってるけど、教科書には(兵十が) ごんのことを考えているってどこにも書いてない。証拠がないから、(ごんの気持ちに) 気づいてないかもしれない」等と、自らの主張を枉げて応答していった。

上述した教師と児童によって表出された授業コミュニケーションの言葉や行為に関する質的分析を通して考察を行う。事例では、教師の内面の葛藤(「論理的認識レベル=作品の叙述に即して主題を理解させたい」vs.「感性的認識レベル=直感的ではあるが経験に即した子どもの思いを受容したい」という自己不一致観)が授業過程において投影されたため、話し合いが行き詰まり、授業自体がぎくしゃくしてしまったものと解釈できる。一方、こうした文脈において子どもたちは、子どもたちなりに表面上は教師の提案を受け入れたように見えたが、教師の心理的動揺が子どもたちに伝搬し、深い部分では混乱を招いていたと解釈することができる(感性的認識レベルから、論理的認識レベルへと変換させられた)。

なお現在、結果の詳細については、上記事例を含む複数の事例に関する発話分析カテゴリ集計の数量的分析を解析中であり、今後、研究結果を論文として統括した上で公表する予定である。

(2) 平成20年度の研究計画

算数科の授業を通して、論理的思考力を高める授業を検討し、実践する。現行の学習指導要領に述べられている「算数的活動」を通して「活動の楽しさ」を実感しながら、論理的思考力を育成する。このようなねらいに基づき、視覚的効果による抽象物の具象化を狙ったCG教材の作成、パターンプロックやタングラム等の教材を開発し、図形領域から数領域に至る活用を検討する。

3. 今後の方針

読解力や論理的思考力の研究を実施する場合、一般には国語や算数という各教科の中での検討や数時間の授業の分析ということになりがちである。しかし、教育課程(カリキュラム研究)の視点に立脚するならば、学校の教育活動全体の中で、各教科の教育実践をとらえることが必要である。そこで、19年度及び20年度に実践した国語科と算数科の授業を通して収集した全データを分析し、教授効果の検証を行う。また、本研究で得られた結果に基づき、初等部に対して、カリキュラム・教授法の具体的提言を行うとともに、開発した複数の教材(学習支援ツール)を総括してアーカイブ化し、蓄積する。

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究「小学生の読解力と論理的思考力を高める教授法・カリキュラムおよび教材の総合的開発」の平成19年度中間報告である。

【引用文献】

- 南 博文 1991 事例研究における厳密性と妥当性 発達心理学研究, 2, 46-47.
- 西林克彦 1994 フレームの存在による読み飛ばしとフレームの変更による読みの促進 宮城教育大学紀要自然科学・教育科学, 29, 197-209. (Nishibayashi, K. The Cause of Overlooking in Reading and the Facilitation of Comprehension. Bulletin of Miyagi University of Education, Natural Sciences and Education, 29, 197-209.)
- 作間慎一 2004 文学作品における心情理解の教授学習心理学的研究 - 『ごんぎつね』におけるごんの心情理解 - 玉川大学教育学部論叢, 55-70.